

タイトル	現代日本語における指示詞派生副詞の指示的性質について
著者名（所属）	竹内直也（相模女子大学（他）非常勤講師）
連絡先 E メール	Take1234[ア]basil.ocn.ne.jp
論文内容	<p>指示副詞についての研究は岡崎友子の一連の研究など多くあるが、指示詞にその他の語がついた指示詞派生語彙については個別の検討が中心で、それらを体系的に整理したものと及びその機能の連続性についての考察は見られない。また、指示詞が副詞化すると、低評価を表すことが多いと感じられる。そこで本発表は指示詞派生副詞「こんなに」系と「これほど」系の程度性に着目し、指示詞派生語彙の連続性について考察した。</p> <p>指示詞派生のプロセスとして竹内（2017）で「それから」で行った指示詞から接続詞化するプロセスを援用した。竹内（2017）では「指示詞→指示機能を持つ機能→接続詞独自の機能」というプロセスを提示したが、程度を表す指示詞派生副詞については、「指示詞→程度の機能→程度＋評価」の順に派生すると仮定した。</p> <p>用例を検討すると、「指示詞＋付属語」となる例は「こんなになる」「そんなになる」の形しか現れず、「これほど」系では見られなかった。次に評価の入らない程度の用法であるが、「こんなに」系、「これほど」系どちらも数量およびもののはなはだしさを表していて、数量に関連するものや特定の事物に対して用いられる点が確認できた。そして「程度＋低評価」の例であるが、用例の半数以上を占め、「こんなに」系、「これほど」系の主たる用法となっている点が確認できた。低評価がある以上、高評価があると考えられるが、高評価となるものは「私も十年前にこの委員会に参加をしまして、これほどにぎわっているのは初めてでございます。（国会）」の例のみで、ほかに高評価に近づくものは「こんなに／これほど＋低評価の語の否定」の形があるが、これらの例は典型的な高評価とは言えない。なお、「こんなに」系、「これほど」系のもととなる指示詞「こんな」「これ」は評価が入らず、高評価・低評価ともに用いられる点からみても、程度に評価が加わる点は指示詞派生副詞としての特徴といえることができるだろう。</p> <p>指示詞派生副詞において、否定的評価のみが独立することは指示詞の機能から見ても考えにくく、高評価についても使えるはずだが、現時点ではほとんど用例が現れず、二重否定形式でみられるのみとなっている。そうした点からみると、指示詞派生副詞は発展途上のものであると考えられる。歴史的に見たときに両者共存していたが、低評価のみ残った可能性があるが、今後の課題としたい。</p> <p>参考文献 庵功雄・三枝玲子（2013）『日本語文法演習 まとまりを作る表現』くろしお出版 岡崎友子（2010）『日本語指示詞の歴史的研究』ひつじ書房 川瀬卓（2023）『副詞から見た日本語文法史』ひつじ書房 木村英樹・金水敏・田窪行則（1989）『日本語セルフマスターシリーズ4 指示詞』くろしお出版 竹内直也（2017）「明治期以降における「それから」の接続詞化について」『相模女子大学紀要』80（pp.（1）-（10））相模女子大学</p>